

大学 FREE
ジャーナル
 vol. **166** **5**月号
第31巻2号・通巻166号

大学生になっても読んでほしい

発行所:くらむぼん出版 〒531-0071 大阪市北区中津1-14-2
 TEL06(6372)5372 FAX06(6372)5374
 E-mail KYA01311@nifty.com

大学ジャーナル
 UNIVERSITY JOURNAL
 ONLINE

http://univ-journal.jp

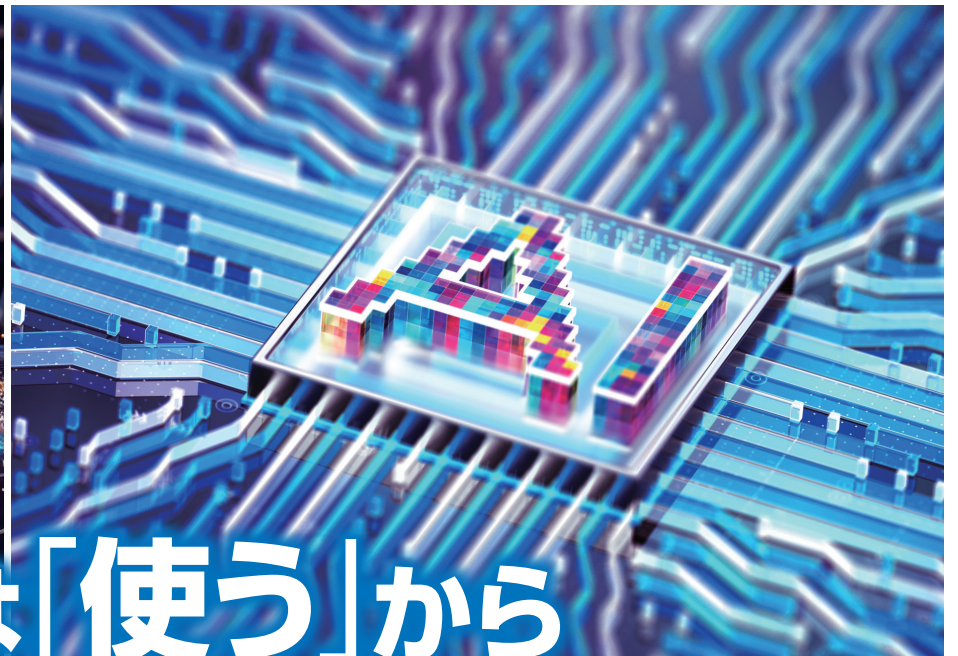


公式 Instagram で
 最新情報を発信中!



AIトッパーランナーから高校生へのメッセージ

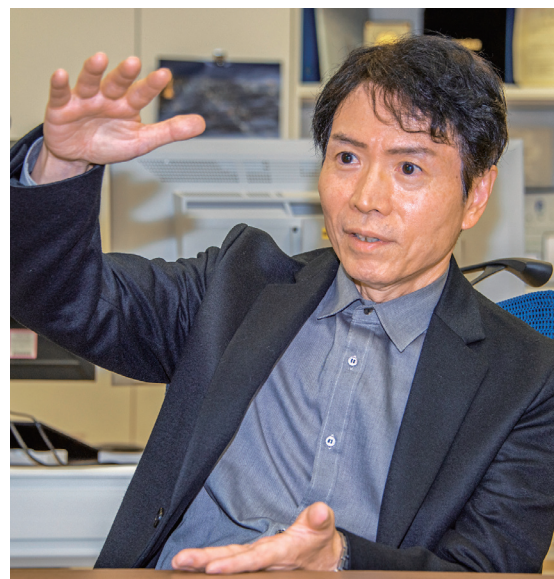
AI for Scienceの時代のために



AIは「使う」から「解き明かす」へ

**核融合から逆問題まで、
 ブラックボックスを開け放つ
 次世代のサイエンス**

ChatGPTや画像生成など、誰もがAIを「便利なツール」として使いこなす時代。そんなAIブームの遥か前から基礎研究に携わってきたのが、日本の機械学習を牽引する上田修功先生。2024年にノーベル物理学賞を受賞したジェフリー・ヒントン教授のもとで招聘研究員を務めるなど、AI黎明期からその歴史と共に歩んできたトッパーランナーだ。「AIにデータを読み込ませて処理を速くしたり、精度を上げたりする時代はもう終わりつつある」。AIは「使うもの」から、人間の果てしない好奇心に応え、科学そのものを進化させる「融合」のフェーズへと突入している。AIの真髄を知る上田先生に、次世代のサイエンスの姿を聞いた。



理化学研究所
 革新知能統合研究センター
 副センター長
上田 修功先生

Profile
 1982年大阪大学工学部通信工学科卒業、1984年同大学院通信工学専攻修士課程修了。1992年博士(工学)。1984年日本電信電話公社(現NTT)に入社し、NTTコミュニケーション科学基礎研究所所長、NTTフェロー等を歴任。また、海外で研究に携わった時期には、ジェフリー・ヒントン教授(2024年ノーベル物理学賞受賞)の招聘研究員としてカナダ・トロント大学や英国・ロンドン大学に在籍した経験を持つ。2016年より現職。専門は機械学習、統計科学、AI for Science。AIを科学そのものを前進させる基盤と捉え、物理学など多様な分野との融合に取り組む。

AIは「精度を上げる」時代から、「真理を解き明かすためのもの」の時代へ

スマートフォンの顔認証から、人間のように自然な文章を生成するChatGPTまで、AIはまたたく間に私たちの日常に溶け込んだ。しかし、最先端の研究現場では、今、世間を賑わすAIブームとは少し異なるパラダイムシフトが起きている。「これまでのAI技術は、大量のデータを使って処理を速くしたり、認識の精度を上げたりすることが主な目的でした。しかし、そうした『精度至上主義』の時代は、

すでに終わりつつあります」と上田先生。現在、世界のトップ研究者たちが熱視線を送っているのが「AI for Science(科学のためのAI)」という領域だ。これまでも、医学や生物学などの分野でAIが使われることはあった。しかしそれは、「膨大なデータがあるから、そこから有用な結果が出るようにAIで分析してほしい」といった、AIをデータ処理の下請けとして扱うマスターズラブ(主従)的な関係によるものが多かった。上田先生が目指すのは、そうした単なる応用ではない。自然科学が長年培って

きた理論や法則、人間の知見、そしてデータを根底から結びつける「新しいAI」を創り出すことだ。AIが科学をサポートするだけでなく、科学の難問がAIの新たなアルゴリズムを生み出す。両者が対等にぶつかり合い、共に発展していく時代を上田先生は見据える。**物理から生まれたAIが、サイエンスを呼び覚ます!** このパラダイムシフトを語る上で、避けては通れないのが物理学との関係だ。2024年、ジェフリー・ヒントン教授らに

ノーベル物理学賞が授与された。これは、現在のAIの基礎となる学習理論が、物理学の考え方を土台に構築されたことを象徴している。しかし上田先生は、そこからさらに一歩進んだ、逆向きのベクトルに注目する。これまでのAI開発が「物理の知恵を借りて、AIの精度を上げる(ヒントン教授らの功績)」ことだったのに対し、上田先生が取り組むのは「AIという強力な計算能力を使い、サイエンスそのものの理解を深める」という挑戦だ。「物理の人たちは、割とそのような『目』

AIトッランナーから高校生へのメッセージ AI for Scienceの時代のために



ていく。この『なぜ?』という好奇心こそが、AI for Scienceという新たな知の探求を突き動かす原動力なのだ。

不可能とされた核融合に挑む「逆問題」が示す AIと科学の真の融合

こうしたアプローチが、最も劇的な成果を生み出しつつあるのが「逆問題」と呼ばれる領域だ。

私たちが高校の授業で解くような「ボールをこの角度と速度で投げたら、どこに落ちるか」を計算するのは「順問題(原因から結果を導く)」と呼ばれる。一方「逆問題」とは、「ボールがここに落ちた。ではこのボールはどんな角度と速度で投げられたのか?」のように、結果から原因を推理する問題のことだ。

その最前線にあるとされるのが、次世代の「夢のエネルギー」として世界中で研究が進む核融合、フュージョンエネルギーの開発。この研究では、装置の中にある超高温のプラズマ全体を直接観測することは不可能だ。そのため研究者たちは、装置の端に取り付けられたセンサーから得られる限られたデータ(結果)をもとに、プラズマの内部で何が起きているか(原因)を推定しなければならない。

核融合の制御は、極めて複雑な偏微分方程式を解き明かすようなものであり、長年専門家たちの間でも「そう簡単に実現できるものではない」と困難視されて

きた。しかし今、この巨大な逆問題に対してAIを活用することで、事態は大きく動き出していると上田先生。(▶フュージョンエネルギーの実用化に挑む武田氏のインタビューは本紙中段へ)

ここで上田先生が強調するのは、「AIの圧倒的な計算力で解決した」という表面的な話ではない。驚くべきことに、AIという新しいアプローチを用いて逆問題に挑む過程では、これまで科学の側でも完全には理解しきれていなかった複雑な方程式の理解が進んでいる。同時に、科学の厳密な知見を組み込むことで、AIの側にも新たな手法やアルゴリズムが生まれているという。

AIが一方向的に問題を解く(下請けになる)のではなく、科学の難問がAIを進化させ、進化したAIが今度は科学の根本的な理解を深めていく。不可能と思われていた核融合の壁を突破しようとするこのダイナミックな相互作用こそが、上田先生の語る真の融合の姿である。

AI時代に問われるのは「土台を作る力」

AI for Scienceの時代に求められるのは、既存のAIツールを上手に使うことだけではない。自然科学が長年積み重ねてきた理論や知見、人間の理解そのものをAIの中へどう組み込むか。上田先生が繰り返し語ったのは、その「基盤をつくる力」の重要性である。

その土台となるものの一つが、線形代

数や確率・統計といった数理の素養だ。上田先生は、大学教育の現場で、行列や確率の基礎を十分身につけないまま入学してくる学生が少なくない現実に危機感を示す。

AI時代に必要なのは、流行の技術を表面的に追いかけることではない。確かな基礎の上に立ち、異なる分野の知見を結びつけながら、新しい方法論を生み出せる人材を育てること。そのためには、教育のあり方そのものも早急に問い直されるべきだと言う。

「横並び」ではなく「融合」から新しい知を生み出す時代へ

戦後の日本は、均質な力を育てる教育によって『ものづくり』の時代を支えてきた。それは、日本の科学技術の発展を支えるための大きな強みでもあった。

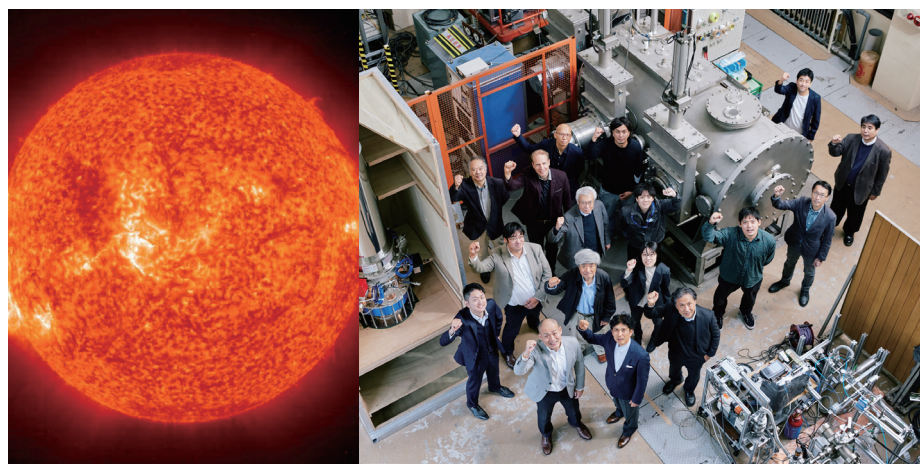
しかしAI for Scienceの時代には、それだけでは不十分だ。分野の境界を越え、物理、数学、情報科学といった異なる知の領域を結びつけながら、新しい発想を形にしていく力がこれまで以上に求められる。

AI研究者が単なるデータ処理、分析の「下請け」になるのではなく、科学の側がAIを便利な道具として消費するのでもない。理論、データ、実験、アルゴリズムが互いに影響し合うことで、新しい知を生み出す。

そのような「融合」こそが、AIとサイエンスの未来像に違いない。

「AI×科学」が加速させる、夢のクリーンエネルギー理論から工学へ。未来を創る大学発スタートアップの挑戦

太陽が輝く原理「核融合」を地上で再現する究極のクリーンエネルギー、それが「フュージョンエネルギー」。この未来技術の実用化を目指し、武田さんらは大学発スタートアップ「京都フュージョンリング株式会社」を創業した。



慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科・准教授
京都フュージョンリング株式会社・共同創業者
武田 秀太郎さん

Profile

2014年京都大学工学部物理工学科卒業。2016年京都大学大学院総合生存学館、修士課程相当修了。2018年京都大学大学院エネルギー科学研究科早期修了、博士(エネルギー科学)。2019年ハーバード大学大学院修士課程修了(サステナビリティ学)。2018年京都大学大学院総合生存学館特任助教、2020年国際原子力機関(IAEA)プロジェクト准担当官、2021年京都大学大学院総合生存学館特定准教授、2022年九州大学都市研究センター准教授を経て、2025年より現職。を経て現職。2019年10月京都フュージョンリング株式会社を共同創業。日本国籍で唯一のマルタ騎士団騎士。東海高校卒業。

社名は、世界中の「ENGINEERING(工学)」とフュージョン研究者を「FUSION(融合)」させたいという想いを込めたものだ。同社は、世界で開発競争が進むフュージョン炉に不可欠なプラント技術や特殊機器の開発に特化し、グローバルに展開する。

かつて「実現はいつまでたっても《30年先》」と揶揄されてきたフュージョンエネルギーだが、近年は民間投資が加速。欧米

政府が「2035-2040年頃の実現」を公言するなど、状況は変わりつつある。

武田氏が起業に踏み出したきっかけは、ある国際会議で、現在の取締役の一人とエレベーターで出会い会話を交わしたことだった。「大学発スタートアップには学術探求と社会貢献を両立できる魅力がある」と武田さん。一つの出会いや純粋な探究心が、世界のエネルギー問題をも解決する大きな力になるかもしれない。

後輩へのメッセージ

とにかく知的好奇心を大切に、自由にいろいろなことに取り組んでください。周りから言われたことを過度に気にしないことも大事です。

過去記事はこちら▶



次号予告

《マインドフルネス》から
《ハートフルネス》へ
あのマーフィー先生に
お聞きします



アメリカ西海岸、シリコンバレーにあって数多くの起業家を輩出することでも知られるスタンフォード大学。その中で起業や社会貢献活動を志向する学生に大人気なのが「ハートフルネスの授業(講義)」。運営の中心はハートフルネス・ラボの創設者で、全米だけでなく海外でもその名を知られる心理学者スティーブン・

マーフィー重松先生。近年は海外研修旅行で参加する日本の高校も増える。日本人の母と米国人の父の間に生まれ、「日米の懸け橋にも、なりたい」と、日本にも頻りに訪れられる先生に、人が幸福であるための心のあり方に付いて、また高校生へのメッセージをお聞きします。

大学ランキングからはわからない大学の實力

第14回

教育ジャーナリスト 小林 哲夫 さん

Profile
1960年神奈川県生まれ。教育ジャーナリスト。朝日新聞出版「大学ランキング」編集者(1994年～)。近著に「日本の「学歴」」(朝日新聞出版 橋木俊詔氏との共著)。



新設大学バッシング 学生募集は地域との連携がカギ

4月2日、参議院文部科学委員会で野党国会議員は文部科学省にこんな質問をしている。

「武雄アジア大学の大幅定員割れ状況について、文科省はどう認識しているのか？」

これを受けて 同省高等教育局長、合田哲雄さんはこう答えている、

「武雄アジア大学の見通しが甘かったものとして大変遺憾。認可した設置計画の履行状況について調査を行う。今後も定員通りの学生が集まらない場合は実績に応じた定員規模縮小を求める。経営改善が必要な状況に陥った場合、経営指導の対象法人とする。」

文科省は誠実に対応している。国会答弁特有の「遺憾」には大学に対する批判、抗議の意味は込められておらず、残念だという思いを素直に示したといっている。

今年、5つの四年制大学が開校した。入学状況は、大学公表、またはメディア報道に基づく次の通りとなる(左から入学者数、定員、定員充足率)。

コー・イノベーション大(岐阜県飛騨市): 51人(120人)42.5%

大阪医療大(大阪府大阪市): 不明(80人)

西日本看護医療大(福岡県北九州市): およそ90人(80人)112.5%

福岡国際音楽大(福岡県太宰府市): 91人(80人)113.8%

武雄アジア大(佐賀県武雄市): 37人(140人)26.4%

残念ながら、コー・イノベーション大、武雄アジア大は定員を大きく下回った。

これに対して、地域、メディアなどの反応は厳しかった。

武雄アジア大について、冒頭に紹介した参議院文部科学委員会でのやりとりからは、質問者には、文科省に対して定員割れした大学を設置認可した責任を問う意図が感じられる。武雄市が13億円、佐賀県が6.5億円の公金を投入したからだ。

そして、SNSでは、武雄アジア大の存続に反対する署名活動が起こった。署名で訴えている内容は、①閉校に向けた整理に直ちに着手、②武雄市は学校法人に補助金13億円の返還を求める、③大学誘致、公費投入などの妥当性を検証し、その結果と責任の所在を明らかにする——などだ。

かつてその地域に大学が開校すると、地元の人たちはおおいに喜んだ。次のようなメリットがあるからだ。①若い人が地域にとどまってくれる、②若い人が地域にやってくる、③キャンパスで食事や清掃などさまざまなビジネスが発生し雇用が生まれる、④大学教員が市民講座

などで専門分野を発信し地域に文化をもたらしてくれる、⑤工学系学部であれば地場産業との産学連携で商品開発ができる、など。

大学は地域活性化の原動力になってくれる、ということだ。少子化に歯止めがかからず、地方都市が疲弊しているなか、大学は希望の星である。

ところが、である。

昨今、地方都市で大学開学という話が伝わっても地域社会、メディアはそれほど歓迎していない。むしろ、冷ややかに受け止めている。「税金の無駄遣い」「大学が多すぎる」「学生が集まるわけがない」という観点からだ。

開学してまもない大学が募集停止となる、残念なケースがあった影響が大きい。

2023年電動モビリティシステム専門職大(山形県西置賜郡)は開学したが入学者は3人、24年は2人だった。25年に募集停止となる。自治体から億単位の支援を受けていたことで批判された。

こうしたことから新設大学はヒーロー、嫌われ者になってしまった感がある。

実際、コー・イノベーション大、武雄アジア大は定員割れが報じられると、SNSでバッシングが起こった。罵詈雑言、罵倒、非難の言葉がぶつけられとても悲しい。

大学に対してもう少しやさしくなりたいと考えるのは筆者だけではないだろう。大学と地域が「町おこしのため一緒にがんばりましょう」という流れにはならないのだろうか。

このような状況を変えるためには大学が地域に溶け込むしかない。どんな小さなイベントでもいい。教職員、学生が地域の人たちと関わって交流する。これを大学が仕掛けるしかない。

共愛学園前橋国際大(群馬県前橋市)は2000年代、定員割れが続き、大学運営でも厳しかった時代を経験している。ところが学長が変わり、地域と積極的に交流したことによって支持が得られ、学生を集められるようになった。入学者数がV字回復したのである。

こうした事例は地方大学でいくつか見られる。ぜひ、参考にしてほしい。

その地域に大学が誕生する。地元民が歓迎し温かく見守る。

大学は地域活性化のカンフル剤になり得る。開学早々、定員割れだから「大学はなくすべき」ではなく、「大学を盛り立てていこう」——そんな雰囲気を作り出されるためにも、大学は日ごろから地域に「一緒に町を作っていきますよ」と呼びかけてほしい。

雑賀恵子の 書評

雑賀 恵子

文筆家。京都薬科大学を経て、京都大学文学部卒業、京都大学大学院農学研究科博士課程修了。大阪教育大学附属高等学校天王寺学舎出身。著書に「空腹について」(青土社)、「エコ・ロゴス 存在と食について」(人文書院)、「快楽の効用」(ちくま新書)がある。本誌では、2008年11月発行の79号から、ほぼ毎号、書評を寄稿。

対話型生成AIを搭載したヒューマノイドロボットが、人間と対話をしているのを見たことがある人は、その自然さに驚いたかもしれない。哲学的な対話もできれば、冗談を言ってからかったりもしてくる。そんなヒューマノイドロボットではなくとも、日常の分野で、ChatGPTやGoogle Geminiなどの生成AIにキャラクター設定をしている人たちの中には、話している相手を人間のようにみなして、現実の人間関係よりもずっと濃い相談相手として依存している人もいる。

もちろん、このようにAIと会話ができるのは、大規模言語モデルによるものである。膨大なテキストデータと高度なディープラーニング(深層学習)技術を用いて、与えられたテキストの次の単語を予測する学習をさせ、適切な単語を回答する能力を得させる。この過程でAIは、文の背後にある文法構造や単語の因果関係なども獲得していく。人間同士の大半の会話でも、表面的には相手が話していることに、どう対応して答えるのが適切であるかを予測して喋っている



生成AI時代の言語論

大澤真幸、松尾豊、今井むつみ、秋田喜美
左右社、2024年

と考えれば、納得できる。

表面的には会話が成立しているとしても、ではAIは思考するのかといえれば懐疑的になるだろう。よく知られているように、フレーム問題と記号接地問題が解決されているとは言えないからだ。人間は現実のさまざまな情報から今は関係のないことを切り捨てる(フレーム化する)ことにより、当面の課題を思考して解決できる。この切り分けができるか。もう一つは、AIが扱う記号(言葉や数値)は、現実世界の意味(実体や感覚)と結びつかかという問題だ。

本書は、この問題を中心に、AIの生み出す言語を考察しながら、逆に人間の言語というものについて追求する。そして、社会と個人との関係、人間というものにはなにか、ということが、議論と論考によって、展開される。

第一部は松尾豊との対談および今井むつみと秋田喜美との鼎談、第二部は大澤真幸の論考4本という構成で、本書は成り立っている。松尾豊は、日本におけるAI研究の第一人者。発達心理学・認知科学の今井むつみと認知・心理言語学の秋田喜美は、オノマトペを手がかりに記号接地問題を参照しながら人間の言語について論じた共著『言語の本質—ことばはどう生まれ、進化したか』(中公新書)で大きな注目を集めた研究者であ

る。

対話によって、自分の思考が深められるということが本書の第一部を読んでも感じられるのではない。自分の思考は必ずしも明確なものではない。それを他者に向けて言語化し、他者もそれを聞き取り受け止めながら、言語で応答する。そのやり取りの中で、自分の思考が形作られ、自分の言いたいことはこれなんだと明確になっていく。他者と自己との間から成り立つ「自分」があり、自由がある。生成AIとの会話では、そうした「自分」を生み出していけるのだろうか。自分の思考はむしろ、相手の情報を受動的に受け入れるものになるのではないだろうか。

生成AIは、加速度的に進化していき、人間が制御できない領域にまで達する可能性は極めて高い。そうした社会を想定しつつ、では、われわれとはなにか、社会の中で、個々の人間が自律し、自由に生きるとはどういうことか、考えねばならない。本書はその意味でも、実に示唆に富んだものである。

龍谷大学、3キャンパスの名称変更へ 「瀬田キャンパス」を「びわ湖大津キャンパス」に 2027年4月から

龍谷大学は京都府と滋賀県にある3つのキャンパスの名称を変更する。キャンパスに新たなコンセプトを掲げ、そのもとで社会課題の解決に向けた共創と挑戦を促進する。あわせて、学部の新設やJR 京都駅前(京都市下京区)への新拠点開設も予定している。

名称変更により、本部がある深草キャンパス(京都市伏見区)が「京都深草キャンパス」に、大宮キャンパス(京都市下京区)が「京都大宮キャンパス」、瀬田キャンパス(滋賀県大津市)が「びわ湖大津キャンパス」となる。

京都深草キャンパスには文学部(1・2年)、心理学部(1・2年)、経済学部、経営学部、法学部、政策学部、国際学部、社会学部などを設置。京都大宮キャンパスには文学部(3・4年)、心理学部(3・4年)などを置く。2029年には京都大宮キャンパスが150周年、2030年には京都深草キャンパスが70周年を迎えるなど、ともに歴史ある京都に長く根差したキャンパスであり、地域や企業、自治体などあらゆるステークホルダーとの関係性をこの地で深化させる。

びわ湖大津キャンパスは先端理工学部、農学部に加え、2027年度から体験を重視し次世代の環境人材を育成する「環境サステナビリティ学部」と、応用力を備えた情報人材を育成する「情報学部」を置く。同キャンパスへは、JR 琵琶湖線「大津駅」から直行バスで約20分。JR 琵琶湖線「瀬田駅」からバスで約8分、JR 湖西線「大津京駅」から大津駅経由の直行バスで約30分。京阪本線「中書島(ちゅうしよしま)駅」から直行バスで約30分という立地。

また、2028年4月には3つのキャンパスに加えて京都駅前で新拠点「共創 HUB 京都(仮称)」の運用が始まる。共創スペースと龍谷大学の学生の交流型住居スペースが一体化したイノベーション拠点として、スタートアップ支援型拠点や龍谷大学のサテライトキャンパスなどを備える予定。

近年の社会課題は環境や経済、健康などさまざまな問題が複雑に絡み合い、単独の組織や一つの学問分野だけで解決が難しくなっている。龍谷大学は、行政と企業、大学、市民が役割を分担して継続的に取り組む「コレクティブ・インパクト」の考えに基づき、全国初の地域貢献型メガソーラー「龍谷ソーラーパーク」(2013年)、「ソーシャル企業認証制度」(2021年)、「京都市脱炭素先行地域推進コンソーシアム」や、滋賀県の「しがネイチャーポジティブネットワーク」の参画など様々な活動を牽引してきた。今回の3キャンパスと共創 HUB 京都(仮称)はこの「コレクティブ・インパクト」の拠点として産官学民による共創と挑戦を展開する。

※環境サステナビリティ学部と情報学部の名称は仮称。設置計画は予定であり、内容に変更が生じる場合がある。

日本女子大学 2027年4月開設予定の「経済学部(仮称)」の学びに触れる実践的ワークショップを開催 約30名の高校生が参加



2026年3月28日、日本女子大学は「女性起業家に学ぶ高校生のためのはじめての起業ワークショップ」を開催した。2027年4月に開設を構想する「経済学部(仮称)」への進学に関心のある高校2年生を中心に約30名が参加し、身近な課題の発見から課題解決の検討、発表までを、参加者同士で意見を交わしながら体験した。

当日は、2026年4月1日「経済学部(仮称)」の特別招聘教授に就任した株式会社ヴェリーナ ジャパン代表取締役 CEO の青木愛氏が講師を務めた。

青木氏は起業に至った思いや、女性として直面した課題、リーダーを目指すことで得た学びや可能性について特別授業を行った。続くワークショップでは青木氏の「誰かの困りごとや違和感に対する“共感”から発想が生まれ、その先に感動を届けることが起業に繋がる」という話をもとに、「両親(身近な人)が困っていること」をテーマとし、自分が共感する課題について参加者同士で話し合った。さらに、価格設定や収益の仕組みも踏まえ、ビジネスとして提案するプロセスを体験した。

ワークショップの後半で行われたプレゼンテーションでは「子どもが親の言うことを聞いてくれない」といった悩みから、親子間の約束ごとを可視化し、スタンプなどで進捗を共有できるアプリ「コネベア」というサービスが提案されるなど、高校生ならではの柔軟な発想からたくさんアイデアが発表された。

参加者からは、「身の回りのあらゆるところに起業するチャンスがあり、実現にはさらに細かい条件を考えていく必要があることが分かった」「学生のうちは起業やアイデアを形にすることは無理だろうと思っていたが、学生でもアイデアと周りの人の共感があれば実現できる可能性があると感じた」といった声が寄せられた。

進路選択においては「社会で役立つ学び」や「キャリアにつながる学び」が重視されており、実社会とつながる学びへの関心が高まりつつある。こうした背景を踏まえ、日本女子大学では、データ分析力をはじめ、多様なライフキャリアを主体的に設計する力、さらに自らの将来を切り拓くアントレプレナーシップ(起業家精神)を柱とする「経済学部(仮称)」の構想を進めている。今後も、「経済学部(仮称)」の開設に向けて、経済学を学ぶ意義を発信し、女子大学で経済学を学ぶことへの関心と理解を高める取り組みを進めていく。

※日本女子大学「経済学部(仮称)」について

経済学および経営学について理論から応用、実践まで幅広く体系的に学ぶことができ、どんな時代や環境においても、自らのキャリアをしなやかに前向きに切り拓くことができるアントレプレナーシップと、現代社会を生き抜くために必須であるデータ分析力、女性が多様なライフキャリアをデザインする能力を身に付けることができる。また、1学年99名というコンパクトな体制を活かした少人数の演習授業、学外での実践的な学びの機会などを提供する。経済学の専門知識を活かしながら、論理的思考力・分析力、組織のマネジメント力、アントレプレナーシップを持って挑戦し、持続可能な社会の構築とウェルビーイングの実現に、創造性をもって主体的にかかわることができる人材の養成を目指す。なお設置計画は予定であり、内容に変更になる可能性がある。

昭和女子大学 2026年4月新設の「総合情報学部」の拠点となる新校舎(10号館)が完成



昭和女子大学は、2026年4月に新設する「総合情報学部」の拠点となる新校舎(10号館)完成に伴い、関係者に向けた内覧会とオープニングセレモニーを開催した。

新校舎(10号館)は地上5階建て。通常の授業教室に加え、映像・デザイン・デジタル表現を実践的に学ぶための「デジタルスタジオ」や学生同士の対話や協働を促す「ラーニングcommons」を設置するなど、データサイエンス学科とデジタルイノベーション学科の学生を中心に、多様な学習スタイルに対応し、主体的な学びを支える最先端の環境を整えている。

設計は昭和女子大学の卒業生(生活科学部生活美学科卒)で、国内外で活躍する建築家の永山祐子氏が手がけた。永山氏はコンセプトを「それぞれの色 = 個性を持った学生たちが出会い、新しい出来事が生まれる場所。この場所を媒介に様々な人、社会、世界とつながります。これからはしなやかな強さを持った女性が未来をつくる時代です。自分の色を持ちながら柔軟に様々な色 = 人々との共演ができる、そんな女性像をイメージしました。差し込む光、見る角度によって様々に色が変化するモアレ効果を持った階段室が光の筒となり、各階に光と色が滲み出します。その姿は十人十色の学生たちがここで交流し、色が混ざり合っていく姿を象徴しています」としている。

テンプレ大学ジャパンキャンパス 2026年秋季学期よりAI学科を新設 アメリカ本校のカリキュラムを提供



テンプレ大学ジャパンキャンパス(TUJ)は、特に英語を使用するビジネス環境において、コンピューターサイエンスおよびAI分野の専門知識・スキルに対する需要の急速な高まりを受けて、2026年秋季学期より、学部課程のAI学科(Bachelor of Science in Artificial Intelligence)を開設する。

今回開設するAI学科は、テンプレ大学アメリカ本校の科学技術学部(College of Science and Technology)のカリキュラムに基づき、プログラミング、機械学習、データサイエンス、AI

応用に関する確かな基礎を提供する。さらに、倫理、人間とAIの相互作用、実践的なプロジェクトなどの重要分野も学び、技術的な深さと応用力の両面を重視した教育を通じて、AIを実社会で効果的に活用できる力を養う。

プログラムはすべて英語で提供され、世界的に評価の高いテンブル大学による教育を手頃な学費で受けられる機会となる。またアメリカ本校で学ぶ機会もあり、TUJの学費水準を活かして、本校での単位取得や学位取得を目指すこともできる。

新学科の開設について、マシュー・ウィルソン学長は「人工知能は産業構造を変革し、グローバルに活躍するために求められるスキルも再定義しています。この新たな専攻学科プログラムは、学生および産業界のニーズの双方に応える、先進的かつ質の高い教育を提供するという私たちの取り組みを反映したものです。日本において英語で提供される世界有数の研究大学のプログラムとして、分野や国境を越えて活躍できる人材の育成を目指します」と述べている。

畿央大学 看護師・保健師・助産師の国家試験で6年連続の全員合格を達成



2026年2月に行われた看護師、保健師、助産師の国家試験において、畿央大学健康科学部看護医療学科の15回目の卒業生は、看護師国家試験に96名、保健師国家試験に13名が挑戦し、全員が合格を果たした。また、助産学専攻科でも9名が助産師国家試験を受験し、開設から14年連続となる全員合格を達成した。

畿央大学は、「看護師」「保健師」「助産師」の3資格で2021年卒生から6年連続で全員合格の記録を更新した。この成果について、看護医療学科の河野由美学科長は「本学の学生はよく頑張りを、看護医療学科卒業生・助産学専攻科修了生全員が現役合格をはたしてくれました。コロナ禍はもちろん学内外の実習に国家試験、卒業研究などのハードルを乗り越え、心を折ることなくしっかり学修に励んでくれたことに敬意を表します。国家試験の合格を確実にしていくために、なお一層の支援強化をはかりたいと思います。」とコメントしている。

畿央大学では、今後もすべての学生が夢をかなえ、その一步を踏み出せるようサポートしていく。

東洋学園大学が資源循環型リサイクルシステム「紙対応」を導入 大学内で発生する不要な紙資源をトイレトーパーなどに再生

東洋学園大学は、古紙リサイクルシステムを推進するコアレックス信栄株式会社と連携し、大学内で発生する不要な紙資源をトイレトーパーなどに再生する資源循環型リサイクルシステム「紙対応」を導入した。

東洋学園大学では、これまでもSDGs(持続可能な開発目標)の達成に向けた教育活動やキャンパス運営に力を入れてきた。大学という環境柄、授業資料や研究データ、学生のレポートなど、日々大量の紙資源が消費され、同時に多くの不要紙が排出されている。これらを単なる廃棄物として処理するのではなく、新たな資源として循環させる取り組みの実現に向け、独自の古紙再生技術を持つコアレックス信栄との連携に至った。

今回導入する「紙対応」は、キャンパス内で発生する紙資源をコアレックス信栄が回収・溶解し、トイレトーパーなどの生活必需品へリサイクルする仕組み。同社の特殊な溶解技術により、ホチキスやクリップ、バインダーの金具が付いた状態の紙や、従来はリサイクルが困難とされていた難再生処理紙も、分別不要で溶解・再生することが可能。また、温水で溶解しリサイクルするため焼却処分と比べ、CO2排出量の大幅な削減にも貢献する。

現在は、大学から排出される紙資源の回収・リサイクルのフェーズを開始。今後は、東洋学園大学から排出された古紙を原料として製造されたコアレックス信栄のトイレトーパーを、大学キャンパス内の化粧室へ導入することを計画している。学生や教職員が「自分たちが排出した紙が製品として戻ってくる」という循環を日常的に体感することで、環境問題への意識向上と行動変容を促す、生きた教育の場を目指していく。

成蹊大学 総合型選抜に学力の強みも評価する「基礎学力型」を新設 2027年度入試より

成蹊大学は、2027年度入試から総合型選抜を見直し、純粋な学力を強みとする受験生の力を正当に評価する「基礎学力型」と高校での探究的な学びや多様な活動を通じて培われる能力を評価する「自己推薦型」の2種類を中心に再編する。

高校段階に探究的な学びが広がったことで、大学入試においても「表現力・探究性」を起点に多様な力を評価する枠組みが定着してきた。一方で入学後の円滑な学修に向けて、各学部・学科に応じた学修基盤の確認も重要になっている。そこで総合型選抜を従来の多面的評価の流れをくむ自己推薦型と基礎学力型にすることで、受験生の進路選択をより柔軟に支援する。

新設する「基礎学力型」は経営学部、法学部、文学部、理工学部で実施する。経営学部、法学部、文学部は国語と外国語(英語)、理工学部は数学と外国語(英語)の2教科の学力試験と能力・意欲・適性等を提出資料(調査書・活動報告書)で評価し、多面的・総合的に合否判定する。外国語(英語)は英語外部検定試験のスコアが利用できる。また、学部横断の共通問題を採用し複数学部併願にも対応する。他大学との併願可能で、所定の手続を行った場合に限り入学手続締切日を3月1日まで延長できるようにして受験生に過度な負担が生じないように配慮する。

現在「多面的評価型」として行っている総合型選抜は「自己推薦型」として継続し、経済学部、経営学部、法学部、国際共創学部、理工学部で実施する。表現力、意欲、取り組みの過程などを重視して、書類による一次審査と、学部によって異なる二次審査(プレゼンテーションやグループディスカッションをはじめ、資料読解力や思考力を問う筆記試験など)の2段階で選抜する。

なお、現時点での予定であり、今後変更となる可能性がある。詳細は次年度公表の入学試験要項で確認すること。帰国生特別受験、社会人特別受験、外国人特別受験は、2027年度選抜からも従来どおり継続する。

明治大学理工学部 電気電子生命学科が「学力考査」を廃止し 「資格・検定試験の成績」を活用 2027年度自己推薦特別入試



明治大学は2026年3月23日、理工学部自己推薦特別入試について、2027年度入試の選考内容や変更点を集約した情報をWebサイトで公開した。大きな変更点としては、電気電子生命学科(電気電子工学専攻・生命理工学専攻)が学力考査(数学/英語)を廃止して、新たに資格・検定試験の成績活用を導入する点が注目される。

同大学の理工学部で自己推薦特別入試を実施しているのは、電気電子生命学科に加えて、機械情報工学科、建築学科、応用化学科の4学科。2026年度入試では電気電子生命学科のみ、学力考査(数学・英語)を行っていたが、2027年度入試では資格・検定試験の成績を活用する。

具体的には、2027年度入試における電気電子生命学科の自己推薦特別入試の選考方法は、出願書類及び「資格・検定試験の成績※」並びに「口頭試問の結果」を総合的に判断して合否を決定する。また、数学の検定試験の成績提出者に対しては、数学の口頭試問を免除するという。

明治大学の自己推薦特別入試は、公募型の総合型選抜で、一定の条件を満たせば、自らの意思で自由に出願が可能。2026年度入試では、理工学部を含む5学部で実施されている。選考方法は、各学部・学科の学びに応じた特色があり、単なる筆記試験では判定が難しい能力・適性・意欲・目的意識・コミュニケーション能力などを測る。

選考方法などの内容は変更される可能性があるため、2026年6月から随時公開予定の募集要項での確認が必要となる。

※資格・検定試験は、「英語4技能資格・検定試験(必須)」と「実用数学技能検定(任意)」の成績が活用される。

日本の大学・教育関連専門のニュースサイト

大学ジャーナル

UNIVERSITY JOURNAL

ONLINE

その他の詳しい大学関連ニュースは

大学ジャーナルオンライン

SEARCH



@univjournal



大学ジャーナルオンライン

全国47校の代表がつくばに集結

科学の甲子園全国大会



実技③ 電磁誘導を生かして挑むリング射出競技

事前公開競技「目指せ！電磁力でカップイン」(競技者4人・競技時間160分)は、トムソニング装置を用い、アルミ製のジャンプリングを得点エリアへ射出する実技競技です。会場ではコイル、鉄心、発射台を製作し、事前製作のTR電気回路、ジャンプリングと組み合わせる競技に臨みました。予選チャレンジでは60秒の間にリングを発射し、カップ100点、グリーン45点、ラフ20点として得点を競いました。したがって、この競技で問われたのは単なる飛距離ではなく、コイルや鉄心の工夫、

リング形状、射出角度、充電電圧、発射回数バランスをどう最適化するかという総合的な設計力です。電磁誘導という教科書の原理を、工作・調整・作戦へと結びつけられるかが勝敗を分けました。その結果、岡山県立岡山朝日高等学校

(岡山県)が1位となり、学研賞に輝きました。2位のナリカ賞は茨城県立土浦第一高等学校(茨城県)、東京エレクトロン賞(工作デザイン賞)は徳島県立城ノ内中等教育学校(徳島県)が受賞しました。

各競技の詳細・考察(Web版)はこちら

実技② 見えないイオンを手がかりに化合物の正体に迫る

「イオン交換エクスペレス」(競技時間100分)は、硫酸銅(II)水溶液の濃度を求めるとともに、①⑧の白色粉末に含まれる化合物を特定していく実技競技です。試料の候補は、Na、K⁺、Cs⁺の3種類の陽イオンと、Cl⁻、Br⁻、I⁻、SO₄²⁻の4種類の陰イオンからなる12種類で、参加者は陽イオン交換樹脂を通して得た酸をZnO₂で滴定しながら、観察結果をもとに未知試料の正体を絞り込みました。したがって、この競技で問われたのは単なる滴定の正確さではなく、使う器具や白色粉末の量をどう選ぶか、限られた時間の中で実験計画をどう組み立てるかという総合的な判断力です。見えないイオンのふるまいを、操作・観察・考察を通して確かな答えへ結びつけられるかが勝敗を分けました。その結果、石川県立金沢泉丘高等学校(石川県)が1位となり、UBE三菱セメント賞を受賞しました。2位は愛光高等学校(愛媛県)で、テクノプロ賞を受賞しました。ジー・サーチ賞(実験スキル賞)は鳥取県立鳥取西高等学校(鳥取県)が受賞しました。

各競技の詳細・考察(Web版)はこちら

16歳からの大学論

第49回

大学新入生へのメッセージ

京都大学 学際融合教育研究推進センター 准教授 宮野 公樹 先生

2026年、大学新入生の皆さんに、まず問いたいことがあります。皆さんは何のために大学に入学したのでしょうか。学びたいから、仲間を創りたいから、色々あることかと思えます。今回は、その中でも特に大学の本分である「学問」について話したいと思えます。

突然ですが、「学問」とは一体何でしょうか。

私たちは往々にして、効率的に「答え」を出すことや、誰かが用意した「正解」をなぞることに習熟してしまっています。しかし、ネット上に知識が溢れ、AIが瞬時に論理的な回答を導き出す現代において、単なる知識の習得としての「学習」には限界がありま

す。大学という場において真に求められるのは、既存の知識を疑い、「なぜ自分はそう問うのか」と自らの在り方を問い直す、いわば「自分自身のものさし」を育てる営みなのです。これこそが、学問の本質にほかなりません。学問とは自分の内に自分を見つめるもう一つの目を持つことなのです。

現代の日本社会には、「いい大学、いい会社、高い年収」という強固な「成功のルール」が存在します。それに乗っている限り、周囲からは称賛され、楽に生きていけるかもしれません。しかし、それで「自分の人生」を生きていると言えるのでしょうか。もちろん、心からその既存のルールを信じ、自分はこのだと考えるのであればそれはそれでよいことです。ただその場合でも、一人ひとりが「別のルール」を認めるとい

Profile

1973年石川県生まれ。学問論、大学論。総長学事補佐、文部科学省学術調査官の業務経験も。国際高等研究所主任研究員、日経STEAMアドバイザー。近著「問いの立て方」(ちくま新書)。2025年5月、NHKによる7ヶ月間の密着取材がドキュメンタリー番組に(ETV特集「ねちねちと、問うーある学者の果なき対話ー」)

わば心の余白とでもいふべきものを持たないと、社会はギスギスしていきまじ、現に今そうなっているようにも思えます。大学は多様な人が集まる場であるからこそ、その多様性を体で感じるということがとても重要なのです。

そこで重要になってくるのが対話です。対話は、もちろん他者とのコラボレーションに欠かせないものですが、学問する際にも、他者との意見交換を通じて自身が正しいと信じてきた価値観を一度横から眺めてみるためにも必要です。いうならば、対話とは自己の内省を深め、「我が身を振り返る」ための鏡のような存在なのです。

学問は決して一人で完結するものではありません。自分の視野の狭さを知り、新たな視点を得るためには、他者との「対話」が不可欠なのです。異なる分野や価値観を持つ人々と出会い、自分自身が変わる覚悟を持って対話に臨むこと。その構え、プロセスこそが、大学を「学問の場」たらしめるのです。

「将来のキャリア」を築くために大学を利用するののも一つの方法かもしれませんが、しかし、キャリアの本質を問わぬままでは、単に「働く、食うために働く」という循環に陥ってしまいます。これでは一生幸せは訪れないのではないのでしょうか。なぜなら我々は本来、「人生を生きるために働く」のですから。では、その「人生」とは、そして、「生きる」とはどういうことか。この問いを深めることも、大学で学問するということなのです。(続く)

さまざまな競技で頂点を決する



科学の甲子園全国大会

697校、7892人がエントリー

科学の甲子園は、全国の科学好きな生徒が集い、競い合い、活躍できる場を構築・提供することで、科学好きの裾野を広げるとともに、トップ層の学力伸長を目的としています。第15回大会には、697校から7892人のエントリーがありました。

開会式では、司会者から

大会初日は開会式とオリエンテーション、科学に関する知識とその応用力を競う筆記競技が行われ、2日目には実技競技、3日目には表彰式やフェアウェルパーティなどが行われました。

「第16回科学の甲子園全国大会」は、令和9年3月下旬に茨城県つくば市で開催される予定です。

筆記

身近な現象を発展させた問題構成が特徴的な筆記競技

教科・科目の枠を超えた融合的な問題にチームで挑む筆記競技は、各チーム6人を選出して行われました。競技時間は120分。メンバーそれぞれの得意分野を活かしながら協力し、理科・数学・情報の知識をもとに、その応用力や思考力が問われる問題に取り組みました。

今年の問題は、身近な現象を出発点としながらも、物理法則や数値モデルへと発展させる構成が特徴的でした。例えば第1問は、ペットボトルを用いた打楽器を題材に、「内部の空気圧の変化によって音の高さが変わるのか」という問いから出発します。気体の状態変化(理想気体の性質)に加え、弦の振動、さらには曲面の張力と圧力の関係といった内容を段階的に扱い、最終的には振動数と圧力差の関係を導くという展開です。

このように、今年の筆記競技は、単なる知識の再生ではなく、「異なる分野をつなぐ視点」と「現象をモデル化する力」が求められる問題構成となっており、チーム内での役割分担や議論の質が得点に大きく影響する内容でした。第1位のスカーパーJ.S.A.T賞は東大寺学園高等学校(奈良県)で、第2位の内田洋行賞はラ・サール高等学校(鹿児島県)でした。

実技①

見える波と見えない波 その違いを探る

「海の波の速度の不思議」(競技時間100分)は、大型水槽でつくる表面波と、真水と食塩水の境界に生じる内部波を観察・測定し、その違いを考察する実技競技です。課題1では表面波の速さを測定し、水粒子の動きや、波が進んでも水そのものが遠くまで運ばれるわけではないことを確かめま

した。課題2では小型水槽で内部波の速さを測り、食塩水の濃度を変えたときに波の伝わり方がどう変わるかを予想・検証しました。目に見える海面の波だけでなく、水の内部をゆくり進む波まで扱うことで、地学と物理の両面から現象を捉える力が問われました。観察結果をもとに筋道立てて

考え、チームで役割分担しながら解答を組み立てていく力も試される競技で、ラ・サール高等学校(鹿児島県)が1位となりトヨタ賞を、久留米大学附設高等学校(福岡県)が2位となりケニス賞を受賞しました。スリーエム ジャパン賞(熟考探究賞)は滋賀県立膳所高等学校(滋賀県)に贈られました。

各競技の詳細・考察(Web版)はこちら



第15回 科学の甲子園全国大会 出場校

都道府県名	学校名(カッコ内は出場回数です)
北海道	北海道札幌南高等学校(2)
青森県	青森県立八戸高等学校(3)
岩手県	岩手県立大船渡高等学校(初)
宮城県	宮城県仙台二華高等学校(8)
秋田県	秋田県立秋田高等学校(11)
山形県	山形県立山形東高等学校(6)
福島県	福島県立福島高等学校(7)
茨城県	茨城県立土浦第一高等学校(4)
栃木県	栃木県立石橋高等学校(初)
群馬県	伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校(2)
埼玉県	埼玉県立川越高等学校(3)
千葉県	千葉県立東葛飾高等学校(5)
東京都	東京都立日比谷高等学校(初)
神奈川県	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校(初)
新潟県	新潟県立新潟高等学校(13)
富山県	富山県立高岡高等学校(初)
石川県	石川県立金沢泉丘高等学校(9)
福井県	福井県立高志高等学校(2)
山梨県	山梨県立吉田高等学校(6)
長野県	長野県松本深志高等学校(4)
岐阜県	岐阜県立岐阜高等学校(15)
静岡県	静岡県立浜松北高等学校(3)
愛知県	東海高等学校(2)
三重県	鈴鹿中等教育学校(初)
滋賀県	滋賀県立膳所高等学校(14)
京都府	京都市立堀川高等学校(4)
大阪府	大阪星光学院高等学校(5)
兵庫県	白陵高等学校(3)
奈良県	東大寺学園高等学校(6)
和歌山県	和歌山県立桐蔭高等学校(3)
鳥取県	鳥取県立鳥取西高等学校(10)
島根県	島根県立松江北高等学校(9)
岡山県	岡山県立岡山朝日高等学校(6)
広島県	広島学院高等学校(9)
山口県	山口県立徳山高等学校(6)
徳島県	徳島県立城内中等教育学校(2)
香川県	香川県立高松高等学校(5)
愛媛県	愛媛県立愛媛高等学校(8)
高知県	高知県立中村高等学校(初)
福岡県	久留米大学附設高等学校(14)
佐賀県	早稲田佐賀高等学校(初)
長崎県	長崎県立長崎西高等学校(8)
熊本県	熊本県立熊本高等学校(3)
大分県	大分県立大分上野丘高等学校(10)
宮崎県	宮崎県立宮崎西高等学校(15)
鹿児島県	ラ・サール高等学校(15)
沖縄県	沖縄県立開邦高等学校(8)

第15回 科学の甲子園全国大会

岡山朝日高校が中国地方に初の優勝旗を

東大寺学園は12回大会に続きまたも涙

岡山県立岡山朝日高等学校

総合優勝した岡山県立岡山朝日高等学校のメンバー



近年の傾向として、公立も含め中高一貫や中学校を併設する学校の活躍や、女子生徒の割合が増える中、併設中学のない公立高校で、しかも男子だけのチームの優勝となりました。また、科学の甲子園ジュニアの前年優勝チームが、実技競技3にゲスト参加し、第13回大会優勝の千葉県代表チームが上位に食い込み話題となりました。「第16回科学の甲子園全国大会」は、2027年3月下旬に、茨城県つくば市で開催される予定です。

激戦を制した岡山朝日高校の優勝は県立高校としては5年ぶり、中学の併設されていない高校として9年ぶりとなりました。

表彰式では、「日頃の努力の結果が出てすごく嬉しい」。勝因については、「実技3で1位だったこと」「それとみんなで協力して互いに弱点を補いあえたことが大きかった」と答えたメンバーたち。キャプテン三浦さんは優勝チーム記者会見で再び今の感想を問われると、「正直、まだ現実を受け入れることができて、少し困惑していません」と、まだまだ興奮冷めやらぬ様子。同じく岡山さんも「夢ではないか」と。

これからの見据えた意見も聞かれた。森平さんはサイエンスオリンピックアドヘン向け、「今回の実技競技に出て悔やまれたことを修正できる最後の機会になると思う。頑張ってください」と意気込みを聞かせてくれた。

最後に引率の関和久先生は「私も生徒たちと同じで、実技競技3で1位になれたことが嬉しく、そして最後まで頑張った結果が優勝につながったのではないかと思います。同時に、優勝できたことがまだ夢ではないかとも思っています。これから先も、今回の力を生かして頑張ってもらいたい」と結ばれました。

個性豊かな人たちと交流できたのが嬉しかった」と、大会の意義を強調してくれた。

大学ジャーナル

FREE

科学の甲子園特集

発行所：くらむぼん出版 〒531-0071 大阪市北区中津1-14-2
TEL 06 (6372) 5372 FAX 06 (6372) 5374
E-mail KYA01311@nifty.com

第15回科学の甲子園全国大会(科学技術振興機構主催、茨城県など共催)が、3月20〜23日の4日間、つくば市のつくば国際会議場およびつくばカピオで開催されました。本大会の各都道府県における代表選考には、697校から7,892人がエントリー。予選を勝ち抜いた全国47都道府県代表校は、1・2年生の6〜8人から成るチームで、科学に関する知識とその活用能力を駆使してさまざまな課題に挑戦し、総合点を競い合いました。筆記競技と3種目の実技競技の得点を合計した総合成績により、岡山県代表・岡山県立岡山朝日高等学校が優勝、奈良県代表・東大寺学園高等学校が第2位、大分県代表・大分県立大分上野丘高等学校が第3位となりました。

優勝の喜び 勝因は緊密な連携と協力



(後列左から) 高橋好汰、八木悠高、青木仁志、三浦聡将
(前列左から) 畠山直、山本凱大、森平詩悠、佐野匠



2位

奈良県東大寺学園高校

東大寺学園高等学校

3位

大分県立大分上野丘高校

大分県立大分上野丘高等学校

【第15回 科学の甲子園全国大会】 成績一覧

競技・成績	学校名
総合優勝(文部科学大臣賞、TOEFL賞)	岡山：県立岡山朝日高校
総合2位(科学技術振興機構理事長賞、日本理科教育振興協会賞)	奈良：東大寺学園高校
総合3位(茨城県知事賞、SHIMADZU賞)	大分：県立大分上野丘高校
総合4位(つくば市長賞、旭化成賞)	茨城：県立土浦第一高校
総合5位(日本科学協会賞)	愛知：東海高校
総合6位	広島：広島学院高校
総合7位	徳島：県立城ノ内中等教育学校
総合8位	大阪：大阪星光学院高校
総合9位	千葉：県立東葛飾高校
総合10位	京都：市立堀川高校
筆記競技1位(スカパーJSAT賞)	奈良：東大寺学園高校
筆記競技2位(内田洋行賞)	鹿児島：ラ・サール高校
実技競技① 1位(トヨタ賞)	鹿児島：ラ・サール高校
実技競技① 2位(ケニス賞)	福岡：久留米大学附設高校
実技競技② 1位(UBE三菱セメント賞)	石川：県立金沢泉丘高校
実技競技② 2位(テクノプロ賞)	愛媛：愛光高校
実技競技③ 1位(学研賞)	岡山：県立岡山朝日高校
実技競技③ 2位(ナリカ賞)	茨城：県立土浦第一高校
企業特別賞(帝人賞)(女子生徒応援賞)	大分：県立大分上野丘高校
女子生徒3名以上を含むチームの中の最優秀校	
企業特別賞(リソー教育グループ賞)(フレッシュマン応援賞)	千葉：県立東葛飾高校
1年生1名以上を含むチームの中の優秀校	
企業特別賞(スリーエム ジャパン賞)(熟考探究賞)	滋賀：県立膳所高校
実技競技①において優れた考察を行った優秀校	
企業特別賞(ジー・サーチ賞)(実験スキル賞)	鳥取：県立鳥取西高校
実技競技②において優れた実験スキルを発揮した優秀校	
企業特別賞(東京エレクトロン賞)(工作デザイン賞)	徳島：県立城ノ内中等教育学校
実技競技③において優れた工作デザインを開発した優秀校	